



羽田空港に到着した一行と出迎えた学生たち(7月3日)

機能性分子・生物化学に関する  
台湾國立清華大との共同研究

2013年度から7年間継続して行っていた台湾國立清華大学と慶應義塾大学との夏季学生交流事業ですが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる影響で、2020～22年度の3年間は実施できませんでした。しかし、ついに今年度は4年ぶりに科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」のご支援により本事業を再開することができました。

7月3日に清華大学から5名の大学院生がイチョウ・ツイ教授に引率され、羽田空港に到着しました。いずれの学生も化学を専攻しており、それぞれの専門分野から受け入れる5つの研究室をあらかじめ決めておきました。

高尾 賢一  
(慶應義塾大学  
理工学部教授)

## 慶應義塾大学の活動報告

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

II 特別連載 II

第388  
回

まずは慶應義塾大学理工学部の矢上キャンパス(神奈川県横浜市)近くにある国際学生寮に案内し、それから学生証を受け取り、本プログラムの始まりです。それぞれの研究室において、指導教員からこれから4週間で行う研究について説明を受け、早いところでは次の日から実験をスタートさせた学生もおりました。清華大学の学生にとっては慣れない環境での実験になりますので、慶應大学の学生は手取り足取り教えようと頑張ります。コミュニケーションの言語は英語ですので、おたがい慣れない調子で会話を重ね、ときにはボディランゲージも使いながら研究を進めていきます。その甲斐あって、本プログラムが終了する頃には、双方の学生はスムーズに意思疎通ができるまでに成長していました。まさに、研究活動を通じた国際交流が行われたと感じています。

また、7月11日にはミニシンポジウムが矢上キャンパスで開催されました。本シンポジウムは、昨年度オンライン開催を含めると第9回開催となります。清華大学の5名に、慶應大学からも5名が加わり、合計10名により研究成果の発表が英語で行われ、学内から136名の聴講者が集まりました。各発表の後には活発に質疑応答がなされ、ツイ教授もその盛況ぶりに驚いておられました。初めて英語で発表する学生もいましたが、皆さん一生懸命に発表し、質問に答えていたのが印

プログラムスケジュール	
1日目	東京羽田空港に到着、国際学生寮にチェックイン 協定研究生身分証交付、オリエンテーション
2日目	各研究室に配属 実験研究活動開始(以降は継続的に実施)
4日目	ツイ教授(引率教員)講演会
7日目	週末は東京もしくは近郊に案内
9日目	ミニシンポジウムで研究発表、意見交換会
11日目	日本化学会化学会館訪問 慶應義塾大学三田キャンパス訪問
20日目	慶應義塾大学大学院修士課程中間発表会に参加
22日目～	引き続き活動継続のため自費にて延長滞在
26日目	研究報告会で実験結果を発表
29日目	東京羽田空港より出国



三田演説館の前で(7月13日)



ミニシンポジウムの発表者と指導教員(7月11日)

象に残っています。シンポジウム後には感染症対策をとりながらミキサーが催され、両大学の懇親をさらに深めることができました。その二日後の7月13日には、日本化学会化学会館(東京都千代田区)に表敬訪問しました。澤本光男常務理事と事務局の方々にご参加いただいた懇談会では、各々の現在の研究や今後の進路、台湾の就職事情などについて意見交換が行われました。これらの様子は同会ホームページで記事が掲載されました。

同日午後は、地下鉄で慶應大学の三田キャンパス(東京都港区)に移動しました。創設者の福澤諭吉について説明を聞きながら、キャンパス内にある図書館旧館や三田演説館などの歴史的建造物を見学しました。その後はすぐ近くにそびえ立つ東京タワーを見物してから横浜に戻りました。もちろん、この日以外にも週末には東京や神奈川周辺の観光を楽

しんだと聞いています。彼らの研究は7月28日まで続けられ、別れを惜しみつつ4週間のプログラムは終了しました。幸いなことに、プログラム中の事故や怪我、病気の罹患などはありませんでした。清華大学から派遣された学生たちは、高度な専門知識のみならず、日本の文化に大いに触れることができていると思います。また、そのような学生を受け入れて共同で実験した慶應義塾大学の学生たちは、国際交流の意識をさらに高めるよい機会となりました。このように、本交流事業は両大学にとって大変意義深く、来年度の実施に向けて準備を始めているところです。あらためて、JSTさくらサイエンスプログラムに感謝申し上げます。

### ● 今後の展望

プログラム終了後に、一緒に研究を行った日本人学生に感想を聞いてみました。

「今回のように長い期間、英語でコミュニケーションを取るのには初めてでしたが、プログラムが終わる頃にはだいぶ良くなったと思います。国際学会や留学へのハードルも下がったように感じました」

「異文化交流を通じて多様な価値観を認識すると同時に、確かな英語力の向上を感じました。自分の研究について英語で説明する良い機会になりました」

「(清華大学の学生は)自分の専門ではない知識も備えており、日々幅広い分野を勉強しているのを感じました。世界の優秀な学生とのやりとりを通して刺激を受け、自身も見習いたいと思いました」

「私がこれまでにやっていた実験方法とは異なる新しい方法を教えてもらいました。また、反対に台湾の研究室では使っていない実験操作に感心する様子がありました」

「一緒に食事に行ったり、週末に遊びに行ったりするのはとても楽しかったです。卒業旅行で台湾に行き、みんなに再会したいと思っています」

このように、清華大学の学生と触れ合ったことによって、どの学生も国際感覚を身につけることができたと感じています。英語力の向上のみならず、研究においても双方の知識が融合したことにより、新しい展開が期待できます。この波及効果は受け入れ研究室全体に広がり、学生たちに与えた教育効果はとて

も高かったと評価しています。

今後の展望は、本プログラムを継続して実施していくことにより、国際的なネットワークを構築し、優秀かつ国際感覚豊かな研究者を育成していきたいと考えています。最後に、発足時から本プログラムを先導していただきました山田徹教授に感謝申し上げます。